- 季刊 -
02
FUKUYA
in KOCHI
2025.3

TAKE FREE

Fuu

あなたの暮らしに、新しい風

FUKUYA LIFESTYLE MAGAZINE

［特集］ これからのリノベーション

フリーマガジン「 Fuu ］
編集 ／ フクヤ建設株式会社 (担当) 広報課 石川 藍
デザイン／ 2.0design 高木恵里
写真 ／ エム・フォトオフィス 前田実津

［ 発行元 ］
フクヤ建設株式会社
〒781-0015 高知市薊野西町3-35-29
088-845-4618
fukuya@fukuya-h.co.jp
@fukuya.kochi
フクヤ建設

特集

これからのリノベーション

高知県の空き家数は、過去最多の7万8700戸を記録。
くわえて住宅価格の高騰も留まるところを知らない今だからこそ、
家づくりイコール新築マイホームという、
今までの「ふつう」を見直すときが来ているように感じています。
今号では、当社が今までに施工した多種多様な
リノベーションの事例をご紹介。
新しい選択肢のひとつとして、リノベーションの可能性に、
一緒に目を向けてみましょう。

フクヤ建設の家、ひと、暮らしを伝える
フリーマガジンFuu(フゥ)は「あなたの暮らしに
新しい風を吹かせますように」そんな思いで、
2023年6月に創刊しました。
日々さまざまな角度から暮らしを考え提案し続ける
当社の働きから、これからの暮らしや
人生を楽しむヒントが見つかりますように。
そして、このマガジンを手にする時間が「ふう」と心
安らぐものになればうれしいです。

CONTENTS

特集

［インタビュー］
リノベーション事業部
「Architect Archive
(アーキテクトアーカイブ)」展示場 03 - 08

時をつむぐ暮らし 09 - 10

「まち」をつくる 11 - 12

あのひとの飾り方 13

すまいとこそだて 14

フクヤで働く、フクヤと働く 15

社長の本棚 16

melbaの、おやつ 17

特集

リノベーション事業部

「Architect Archive（アーキテクトアーカイブ）」展示場 高知市高須の家

設計 田中琉聖（写真・左）
営業 小田誠二（写真・右）

interview

若手社員のふたりが切り開いた これからのリノベーション

当社リノベーション事業部で昨年夏頃に発足した「Architect Archive（アーキテクトアーカイブ）」は、当社の20代若手社員田中・小田による新しいプロジェクト。中途採用でリノベーション事業部に配属されたふたりはすぐに、新築と仕上がりも価格も代り映えのない従来のスケルトンリノベーションに疑問を感じ「コストを抑えながら、もっとリノベーションならではの味わいを残したかっこいい空間をつくりたい」といった想いから、この新事業を社内に提案しはじめた。しかし入社から月日の浅いふたりの、県内でも未だ例を見ない新しい提案はすぐには受け入れられなかった。

そこで、ふたりが行ったのはアンケートによる市場調査。ペルソナであるアパレル店員や、個人事業主、アーティストなどを直接訪問しアンケートを集計・分析し、市場があることを証明していった。そんな熱い想いを汲んで、社長自ら「思うようにやってみたらいいよ」と丁度買取り予定だった中古物件の改修工事を、新事業の展示場として任せてくれたことで、この事業は無事にスタートをきったのだ。

じぶんたちの「かっこいい」「美しい」を頼りに

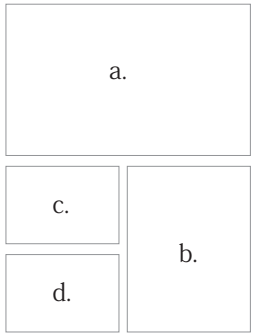
ふたりが理想とした「あるものを、できるだけそのまま残す」新しいリノベーションは、現場がすべて。築32年のごく一般的な民家のポテンシャルを、いかに活かすか。特に、設計の田中は足しげく現場に通いながら、現場監督の手をほとんど借りずに、アドリブで現場の職人に指示を出していったのだという。そんななか、営業でありながらプロダクトデザイナーの経歴を持つ小田も、大きな戦力に。引き算の空間を引き立てる、自由自在でかろやかな造作家具は、彼の存在があってこそ。高校時代からの友人であるふたりは、あうんの呼吸でじぶんたちの「かっこいい」「美しい」をすり合わせながら、理想とする空間を創り上げていった。現場経験も少ないなかで、コストを抑えるために工期を短縮することには相当苦労したそうだが、実際には年末年始を挟みながらも、わずか3ヶ月で完工。そして、思惑通り土地込み1780万円（税込）という驚くほどの低価格でリリースをすることができた。

懐かしさと、新しさを調和する

ArchitectArchive（アーキテクトアーカイブ）のつくり出す空間のコンセプトは「懐かしさと新しさの調和」。既存建物の味わいのある梁や柱、建具やサッシなどを残しながら、露出配管やラワンベニアのラフな造作家具など最近のデザインを上手く馴染ませている。一般的にはアンバランスに感じられるが、実際に展示場を訪れたお客様がまず口にするのは「見たことがない雰囲気だけど、すごくいい」という、新鮮な驚きだ。高気密高断熱の流行から、今の住宅からはすっかり姿を消した出窓も不思議とかっこよく見えるのと同時に、懐かしさや安心感をもたらしてくれているのを感じ「やっぱり、出窓っていいよね」と、ArchitectArchiveのつくる空間には、自然と古いものの良さを改めて実感させてくれる魅力がある。

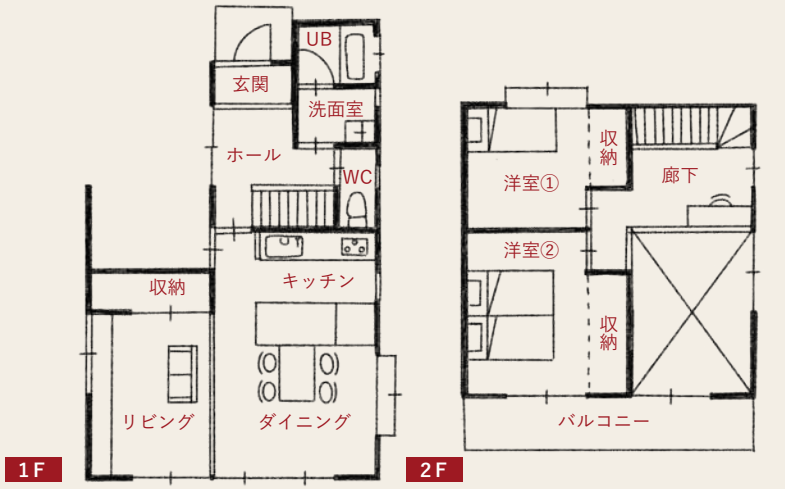
懐かしさと新しさの調和はインテリアにも活かされている。自前のものも多く含まれているというディプレイ雑貨には、IKEAで購入したもの、アンティークのもの、設計田中の曽祖父の盆栽まで、実にさまざまなジャンルがミックスされている。完全ではない空間のおおらかさのなかで、それらは絶妙に調和し合っている。

可変性のある造作家具や、ゆるやかに仕切られたゾーニングなど、今までみたことのない空間と自由度に「じぶんなら、こうしたい」が次々に浮かんでくるたのしさが感じられる。そんなふうに、あえてつくられた余白のなかには「最終的には、住むひとに空間を創り上げていって欲しい」という、ふたりの想いが込められているのだ。



a. 自信作だというリビングの壁面にある大きな造作収納には、さまざまなジャンルの雑貨がセンスよくディスプレイされている。撮影時は、アンティークショップdoorさんのポップアップ商品の他に、ふたりの私物の雑貨が上手く組み合わせていた。
b. 可動棚など、できるだけ可変性を持たせた造作家具のつくりは、ふたりのこだわり。
c. 屋根の色や照明など、赤色がアクセントカラーとして多くに使われているのは、設計田中が「赤が好きだから」なのだとか。
d. 梁の断面に生まれた欠損には、埋木（ウメキ）を行っている。同じ種類の木を使うのが一般的だが、あえて異なる色の木を使うことでワンポイントになっている。

床を抜くことで空間を再生する



間取りは、ほとんど既存建物のまま。唯一、2階南側にあった和室・押し入れは、床を抜き吹き抜けに変更した。おかげで、物件の難点であった1階リビング・ダイニングの、暗さや寒さはすっかりと解消。そして、吹き抜け上部の階段ホールには新たにカウンターテーブルを設置。床を抜くことで、1階と2階のつながりも生まれ、明るく抜け感のある空間が出来上がった。

情報発信はインスタから

Architect Archive（アーキテクトアーカイブ）の展示場や見学会、その他イベント情報はインスタグラムから。インスタグラムの運営も、基本的には設計田中と営業小田のふたりが運営しており、インテリア紹介のリール動画や、改修工事中の現場の写真など独自の目線を感じられる面白い投稿がアップされている。

Architect Archive インスタグラム
@ fukuya_architect_archive

「共感」を大切に小さく輪をひろげていきたい

Architect Archive（アーキテクトアーカイブ）はじめての展示場となる「高知市高須の家」は、オープンから、わずか1ヶ月足らずで買い手がついた。お客さまは、猫と暮らす在宅エンジニアの、40代単身女性。ファッションが好きな感度の高いお客さまで、数社の建売を見比べ「やっぱり、ここの雰囲気がすき」だと、見学初日に再来して即決してくれたのだという。

当初は20代の夫婦をペルソナにしていたが、実際には意外にも40～60代のお客様にも受けがよく、新たな発見にふたりも手ごたえを感じているという。

3月末にはお引渡し予定で、現在はアンティーク雑貨や古着、コーヒーやお弁当のポップアップショップなど2週間おきにイベントを開催中。「共感」を意識したニッチなプロモーションで、小さく、確実にファンを増やしていっている。今後は、オリジナル家具の販売など新たな展開も考えているというArchitect Archiveの新しく刺激的な取り組みから、これからも目が離せない。

[売却済]
AA展示場
高知市高須の家

リノベーション施工年／2025年 1月
構造／木造 2階建て
築年数／ 35年
延床面積／ 26.55坪

見学・お問合せ

現在、高知市十津に 2 棟目となる展示場を工事中。2025 年5 月頃公開予定。
Architect Archive(アーキテクトアーカイブ)に関するお問合せは
088-845-4618　フクヤ建設
080-9830-6416　小田まで

この物件だから「リノベもありかも」と思えた

家づくりを考えはじめた当時は新築が当たり前だと思っていたというが、知人からの紹介でこの物件と出会い、はじめて内覧をした際にご主人が「そのまま住めそう」と口にしたことから、ふたりにリノベーションの選択肢が生まれたのだとか。しかし、薪ストーブを希望していたこともあり、施工面や予算などから「うちでは難しい」と断られることも多々。唯一当社だけが「一緒にやりましょう」と前向きな返答をしたことが決め手になったのだという。そして、物を大切に長く使うご主人の意向もあり、既存の建具なども使える部分はできる限りそのまま活かすことで予算も抑えられ、年月を経た本物のレトロな雰囲気を感じられる、中古物件ゆえの特権を活かしたリノベーションが叶った。

After POINT

［古さと新しさが調和した、個性的で心地よい空間］

POINT 01

リビングをぐるりと囲う L字の土間空間

広い土間を理想としていた奥さまの要望に応えて、担当設計の安藤は、元々縁側だったスペースを使いリビングをぐるりと囲うL字の土間空間を提案。玄関ともそのまま繋がっているため、子どもたちが自転車で遊んだり、近所に住む祖母がベンチに腰をかけて会話を楽しんだりと、内と外をつなぐ空間として多目的に活用されている。

POINT 02

健やかさを叶える 薪ストーブのある暮らし

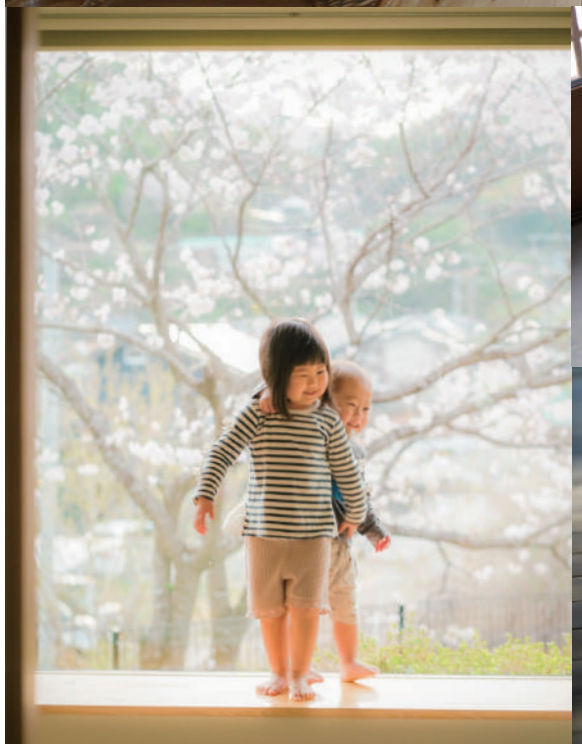
薪ストーブのある暮らしで一番驚いたのは、エアコンが苦手で体調を崩しがちだったご主人が、風邪を引きにくくなったことなのだとか。身体を芯からあたためてくれる薪ストーブのあたたかさはやみつきで、暖炉の前に置かれたロッキングチェアはご主人のお気に入りの居場所になっている。

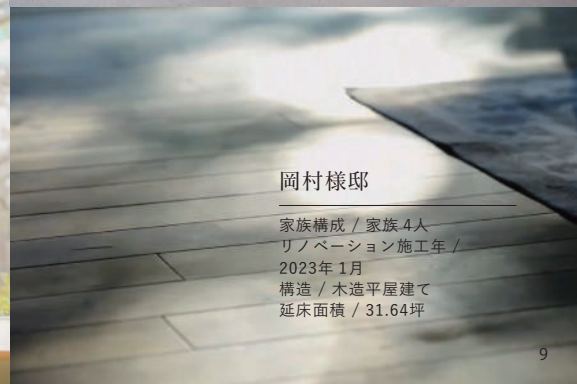
POINT 03

ほっとくつろぐ ヌックのある窓辺

寝室として使用している和室の窓辺には“こぢんまりとして居心地のよい空間”を意味するヌックが。スクリーンのように四角く切り抜かれた窓からは、春には桜がみえる。東側に開けたぽかぽかあたたかいヌックスペースは、ぼんやり外を眺めたり、子どもたちが絵本を読んだりと、家族が思い思いにほっとくつろげる癒しの場所になっている。

時を つむぐ 暮らし





岡村様邸

家族構成 / 家族 4人
リノベーション施工年 / 2023年 1月
構造 / 木造平屋建て
延床面積 / 31.64坪

「まち」をつくる No.02

真っ赤な扉が目印の地域にひらかれた「みんなの居場所」

子育てをきっかけに、いの町にUターンをしたKOKUBAN OFFICE & CAFEオーナー田村さんの本業は、経営コンサルタント。知人の紹介で思いがけず、いの町の中心市街地活性化協議会にアドバイザーとして声がかかり、結果的に商店街衰退の課題に自ら手をあげるかたちで、(株)KOKUBANを立ち上げたのだという。コクバンという名前は、この場所が日本ではじめて緑色黒板を製作した中山黒板教具の工場兼事務所をリノベーションしてつくられたことに由来している。骨組みはもちろん、以前の建物で使われていた黒板や収納棚なども活用することで、新しさのなかにも先人の想いを繋ぎ、残されていることを感じられるやさしい空間が出来上がった。そしてトレードマークの真っ赤な扉は、商店街の通りからは、少し奥まった建物の目印の役割りも果たすのと同時に、まるで「よっといで」と語りかけられるような親しみやすさを醸し出している。室内は、建物中央の段差を境にカフェとオフィスが共存。一見相容れない2つの要素も、元工場兼事務所である大きな空間が許容してくれている。そして、常に人の気配を感じる心地よい騒がしさによって「何かしたくなる」ような、ワクワク感が生みだされているのだ。

© Kenta Hasegawa

© Kenta Hasegawa

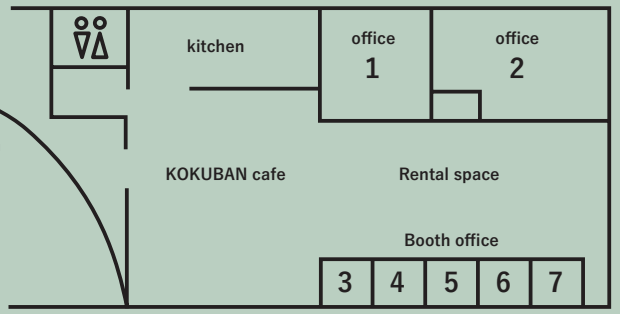
Cafe

肩ひじ張らない〝お母さんの味〟が人気

コクバンカフェオーナーの井上さんと(株)KOKUBANの田村さんは、PTA活動を通して出会ったのだという。開業前から、料理好きでよく家に人を集めて料理を振る舞っていたという井上さん。「高知のお野菜たっぷりの家庭料理」をコンセプトとする、肩ひじ張らないほっとする〝お母さんの味〟で、町内外のお客さまに愛されている。何と、日替わりランチは730円と破格のお値段。子どもからお年寄りまでお客層も幅広く、やさしい空気感がある。また、井上さんの明るいお人柄も人気の理由のひとつ。取材時も代わる代わる常連さんが訪れ、井上さんとのおしゃべりを楽しんでいる姿が見られた。

© Kenta Hasegawa

カフェ営業についてはこちらをチェック！
@ kokubancafe



KOKUBAN OFFICE & CAFE

〒781-2100
高知県吾川郡いの町 3175
TEL / 080-3103-6043
カフェ営業 / 9:00 ～ 16:00
（定休日：日曜日）

オフィス営業についてはこちらをチェック！
@ kokuban_office_cafe

Office

多種多様な活用で地域にビジネスの場を提供

オフィスの運営を担うのは、主に田村さんの奥さま。コクバンカフェのお手伝いをしながら、店舗全体を見守っている。現在、オフィスブースはほぼ満席。登記も出来、コピー機などの設備も整っているため、レンタルオフィス、サテライトオフィス、テレワークオフィスとして県内外のお客さまが利用する。また、空きブースは「KOKUBANの勉強部屋」として学生に無償提供する取り組みも。週末には、ワークショップなどイベントの場としても活用されるなど、多種多様な活用で地域にビジネスの場を提供している。

© Kenta Hasegawa

オフィスブースの料金はこちらをご参照ください。

すまいとこそだて

テーマ「公園」

文・写真 / ふじ農園 藤村さん(2018 年竣工 当社リノベーションOB さま)

ほぼ毎週末、子ども2人を連れて公園に行く。子どもから公園に行こうとせがまれるのではなく、だいたいこちらから行こうと切り出す。子どもが産まれるまで公園なんてほとんど行かなかったのに、今は当たり前のように公園に行く。家が嫌いなわけではない。むしろ僕にとっては世界一居心地が良い。それでも毎週末公園に行く。近所の公園にも飽きてきたら片道2時間かけて遠方の公園へ行き、お弁当を食べ、子どもと遊んで、へとへとで帰ってきて手料理とビールを飲んで思う。さいこー!もしかしたら僕は公園に行きたいのではなく、自分の家と家族ってやっぱり最高だよなと思うために公園に行っているのではないかと思う。

実家の倉庫兼子供部屋をリノベーションして今に至るまで、人生の大半をこの場所で過ごしてきた。子どもがもう少し大きくなったら一緒に公園に行くこともなくなるだろうし、この家から巣立つ日も来る。限りある子育ての時間を考えると寂しい気もするが、早く自立して欲しいとも思う。だからこそ家族と過ごす、この家での時間を大切にしていきたい。

ふじ農園は高知県香南市のみかん農家です。減農薬・減肥料で、暮らしの中においしくて安全なみかんをお届けします。

@fujifarm_kochi

あのひとの飾りかた

interior coordination

羽布（ウフ）　中司　朱芳 さん

“リメイク”だから
チャレンジしたくなる
じぶんらしさを飾るソファ

Fuu編集スタッフ石川も
リメイクソファに
挑戦させていただきました！
完成品は店頭にて
販売中です。

リメイクソファ／71,720yen

1. 数十年前に羽布(ウフ)で新品購入したというソファのリメイク事例もあったのだという。お気に入りのキャメルのレザーもしっかり残しながら個性的で味わいのあるリメイクソファに生まれ変わった。
2. 布地は羽布(ウフ)オリジナルのものの他にも、メーカーのカタログなど数百種類のなかから選ぶことができる。

羽布（ウフ）
〒780-0822
高知市はりまや町３丁目11-25
フリーダイヤル 0120-264-882
TEL 088-885-2888

UFのリメイク
インスタグラム
@uf.remake_

寝具を起点とした生活雑貨を取り揃える羽布(ウフ)が、リメイクソファの取り組みをはじめたきっかけは、代表のご息女でもある中司さんの実体験から。引っ越しでソファを手放そうとしたときに処分費用の高さから「捨ててしまうのはもったいない」と張り替えを思い付き、自社にある布地を使ってリメイクソファに。店頭のディスプレイ用に並べていたところ「このソファ、いくらですか?」などと声がかかるようになり、いつしか事業のひとつとして形になっていったのだという。元々県外のインテリアショップで働いた経験があり、家具に精通した中司さんだからこそ、幅広い要望にも柔軟に対応。手持ちのソファの張り替えはもちろん、アンティークを買い付け、じぶん好みに張り替える若いお客さまなどもいらっしゃるのだとか。新品の購入と比べると費用も抑えられ、とことんこだわれるリメイクソファだからこそ、ふだんは躊躇してしまう色や柄にも気軽にチャレンジできるのも魅力のひとつ。中司さんも、自宅では大好きなオレンジ色のリメイクソファを使用しているのだという。「ソファはリビングのなかでも面積が大きく、お部屋の印象を左右する大切なポイント。ぜひ、思い切りじぶん好みにカスタマイズしたリメイクソファを、飾るようにたのしんでほしいです」と話してくれた。

フクヤで働く、フクヤと働く

File 02

株式会社青木商店　代表取締役
畳一級技能士
青木 宏都 さん

Q 畳の魅力を実感する瞬間は？

A 「やっぱり現場の仕上がりを見て綺麗だなぁ。と感じる瞬間ですね」

青木さんが、畳職人の世界に入ったのは20代半ば。当時、畳床(畳の芯材)事業を営んでいた家業を継ぎ、畳の製造販売をはじめた。「当時からすでに畳は減ってきていましたが、昔は年間数千枚～1万枚くらい出ていたものが、今は1000枚くらい。厳しいですよ」。しかし、業界が縮小していくなか貴重な存在として、馴染みの建築会社や工務店からの受注の他にも、地元の個人宅や保育園からも声がかかり、製造から施工まですべてをひとりでこなす青木さんは、忙しい日々を送っている。畳の魅力について尋ねると「考えたこともなかった」と笑いながら「でもやっぱり、現場でミリ単位の採寸をしてから造るので、現場の仕上がりを見たときは、すげえなぁ。綺麗だなぁ。と思いますね」と話してくれた。また、新畳や表替えでお客さまに喜んで頂けた時が、一番やりがいを感じる瞬間なのだという。メンテナンスのほぼいらない樹脂フローリングなどとは違い、住み手が継続的に状態を見ながらメンテナンスを続けなければならない今では希少な選択肢の建材である「畳」は、現代の建物のなかでは人と人とつなぐ貴重な存在であるとも言える。

社長の本棚

第二回

リノベーションの入り口

「普段生活をしていて、コンセントがここにあればいいのに」「この照明がもう少し左にあればいいのに」「この収納があと15cm大きければいいのに」と、感じることはありませんか？

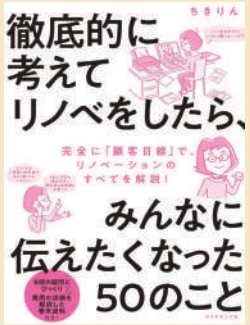
それはもう、リノベーションへの入り口です。

今回ご紹介する本は、人気ブロガーである「ちきりん」さんが自らのマンションをリノベーションしようと考え始めてから直面した多くの苦悩や学び、勘違いをこれからリノベーションを考えてみようかなと検討されているみなさんに向けて、極めて実用的に書かれた本です。

リノベーションの会社選び、契約から設計、施工、引渡までの各プロセスについても詳述しており「リノベしたい。でもどこから始めればよいのかわからない」という計画初期の方や、新築か中古＋リノベかで迷っている方、ネット、雑誌を読み漁っているけど「ますますどうしたらいいかわからなくなってきてしまった…。」という方も参考になるのではないでしょうか。

私たちのようにプロとして建築の仕事をしている側としては、著者の視点に気付かされることも多くありました。「ちきりん」さんの視点は極めて冷静で合理的、そしてきちんとプロの仕事をする工務店、設計士に対するリスペクトがあります(プロの仕事としてどうか…。という事例も書かれています)会社を良い悪い、安い高いという目線で判断するのではなく、「自分と合うか合わないか」「半年～1年のプロジェクトを共に進めるパートナーとして信頼できるのか」という目線で判断する。しかし、その判断を下すには、お客様はあまりにも情報、経験不足(当たり前ですが)だからこそ、お客様にも専門の業者にも、この本を読んでもらい「リノベのなにがわからないのか、なにが戸惑いの源なのか」具体的に理解し、専門家である工務店、設計士とお客様の距離を少しでも縮めて欲しいという気持ちが伝わってきます。費用の詳細や、ショールームを回るコツ、そして著者のリノベのビフォー・アフターや工事の途中の写真も掲載されており、リノベーションの書籍らしい部分も充実しています。2019年発刊の本で、今回の書評にあたり再読しましたが、これからリノベを考えている方にはもちろん、当社スタッフにも読んでもらいたいと改めて感じました。

良いリノベーション体験をお客様に提供できるかは、我々専門家にかかっているのですから。



徹底的に考えてリノベをしたら、みんなに伝えたくなった50のこと
出版社：ダイヤモンド社

福家 淳也
1970年高知県高知市生まれ。明治大学商学部卒業。1971年創業の有限会社福家ハウジング(フクヤ建設株式会社へ改称)2代目。大学卒業後、東京の会社で営業経験を積み1996年に有限会社福家ハウジングへ入社。6年ほど営業職として働いた後、取締役に就任。現在、フクヤ建設代表取締役社長を務める。

この街に、ワクワクを創造する。

FUKUYAは「建築・不動産で、暮らし・空間・その場所に
新しい価値を生み、ワクワクを創造する」という企業理念のもと
家づくりだけでなく、公共民間事業やカフェ経営など
さまざまな事業を展開しております。

東証上場 TOKYO STOCK EXCHANGE LISTED JPX

2024年11月
東京証券取引所に
上場いたしました

【資料請求・問い合わせ】

家づくりに関するお問い合わせ・資料請求はこちら。個人情報の入力なしで、アンケートに答えてご覧いただけるweb 簡易版パンフレットもご利用いただけます。

こちらから→

フクヤ建設 公式LINE
からもお気軽に
お問合せできます

公式 Instagram

ライフスタイルマガジン「Fuu」は、フクヤ建設の家、ひと、暮らしを発信します。日々さまざまな角度から「暮らし」を考え、提案するわたしたちのお届けする情報が、あなたの暮らしに、新しい風を吹かせますように。公式 Instagramでは、誌面には載せきれなかった写真をギャラリーのように投稿しております。

melbaの、おやつ。

季節のフルーツタルト／600yen

デザート監修
melba 上園さん

南国市でテイクアウト専門のケーキ屋さん「melba」をひとりで営む。旬のくだものを使ったタルトやショートケーキなど、素材にこだわったシンプルなケーキが人気を呼び、オープン時には行列ができるほどの人気店。ご縁から、お店の傍らFLAG のデザートメニュー全般の監修を担当している。

本社２階社食ランチが
食べられるカフェ

BISTRO & CAFE FLAG

@bistrocafe_flag

気持ちの華やぐ、季節のフルーツタルト

運ばれてきた瞬間から「わぁ。かわいい！」と気持ちの華やぐ季節のフルーツタルトは、女性に人気のデザートメニュー。フルーツ本来の甘さがしっかりと際立つように、手作りされたこだわりのタルト生地は、甘さ控えめで硬すぎず、内側はしっとり。フォークで切り分けられるサクサクとした触感が、フルーツや生クリームと相性抜群。爽やかな食べ心地に、一口、また一口と、あっという間に完食してしまうほどだ。この日のフルーツは、旬のいちごと文旦。季節によって、小夏・桃・柿・ぶどうなど乗せるフルーツも変わるため、見た目も味もいつも新鮮に楽しめるのもうれしい。フルーツ、生クリーム、タルトの絶妙なバランスに舌鼓をうちながら、紅茶やコーヒーと一緒に楽しんでみてはいかがでしょうか？

BISTORO & CAFE FLAG 通常の営業時間

モーニング　8:00 ～ 10:30 LO（4 月より再開・日曜日限定）
ランチ　11:00 ～ 14:00 LO
カフェ　14:30 ～ 16:30 LO

※最新情報はInstagramにてご確認ください

宴プラン（昼/夜）

予約制で宴プランも受け付けております。詳細はお問い合わせください。